

2007年 第11回日本代替・相補・伝統医療連合会議(JACT)

ストレスが原因と考えられる口腔内不定愁訴が乳酸菌の混合培養により得られた 発酵産物（生源[®]）の応用で治癒した一例

○小野田繁、新良一 a、三浦竜介 b；小野田歯科医院、a エイ・エル・エイ、b ディ・シー・エス

歯科領域においてストレスが少なくとも発症の要因の一つとされる疾患（齲蝕、歯周病、ドライマウス、口臭、舌痛症、味覚異常など）は、いずれも唾液が大きく関与している。一方、人体に係るストレスを定量的に計測するバイオマーカーとして血液や尿などが知られているが、その採取法ならびにその評価は簡便かつ迅速ではない。しかし歯科において唾液採取は簡単に行えるため、株ニプロ社製のストレス測定器具『COCOROMETER』を用い、ストレスが原因と考えられる口渇感を主訴とする患者の唾液のアミラーゼ活性を測定し、乳酸菌の混合培養により得られた発酵産物（以下生源）の摂取前後のストレス変化を追った結果、興味ある知見を得たので報告する。

【症例】

53歳女性。口腔乾燥ならびに口腔内不定愁訴を主訴として来院。職業は長年24時間保育園の保育士をしており、勤務シフトの関係で早朝から深夜までの不規則な長時間労働と、休日を取りにくい環境で慢性的疲労に悩んでいる。10年前に家庭不和も加わり鬱病を発症し、数回のリストカットを繰り返した経験がある。現在、高血圧、高脂血症、不安神経症、頸肩腕症候群の治療の為に投薬を受けており便秘症でもある。この患者に対し生源を1日4.5g、8週間摂取させ、2週間毎に唾液アミラーゼ活性によるストレス評価を行い、同時に口腔内水分測定、唾液pH測定を行った。

【結果】

生源摂取前はストレス度135KU/L、口腔内水分測定29.2%、唾液pH6.0であったが、2週間後にはストレス度77KU/L、口腔乾燥度33.9%、唾液pH6.0となり、8週間後にはストレス度26KU/L、口腔乾燥度32.5%、唾液pH6.5となりストレス度が大幅に軽減した。同時に口渇感、便秘が解消し、精神的不安も解消した。また血圧も当初130/79であったが、8週間後は110/62と下がった。

【考察】

当初11種類の投薬を受けているため薬剤性のドライマウスも疑われたが、本人の希望もあり服用を中断せずに生源との併用摂取を行った。もともと正常範囲内であった口腔内水分測定および唾液pHには然したる変化は見られなかった。ストレスや不安感が順次減少する事を実感したことに伴い、患者はベンゾジアゼピン系精神安定剤の服用を3週間後に自ら中断し、8週間後にはストレス度が81%も減少し正常値を示した。これは精神安定剤の継続的服用でも見られなかったことであり、ストレス軽減に生源が関与したものと考えられる。

【結論】

生源はストレスを軽減させる可能性があることが示唆された。